

今橋映子

●東京大学大学院総合文化研究科教授

カタログアーカイブの形成と —— 展覧会批評の磁場 —— 東京大学駒場博物館資料室の軌跡と学術教育活動の実践

1……………美術批評の場はどこか

現代における美術館、博物館、文学館などの活動の幅は広い(註1)。作品収集、修復保存、研究、常設展示から教育普及活動に至るまで、市民の側から普段見えない活動もまた多々あることだろう。それでもなお、(全国巡回や複数館開催、あるいは館独自などの事業形態いかに関わらず)毎年開催される企画展覧会はミュージアム活動の花形であり、一般市民の側から見ても、その館の活動を最も知る機会となり、学びや憩いの場としても貴重な場となる。ただし、言うまでもなく「展覧会」は一回限りのイベントであるため、その活動の詳細は基本消えてしまう運命にある。何よりもその記録としての役割を果たすのが「展覧会カタログ」であろう(註2)。筆者は美術史そのものを専門とする者ではないが、ひょんなことから、この展覧会カタログの「収集」と「批評」という仕事に20年近く携わってきた。学術教育の現場とミュージアムはいかに「関われる」のか、以下は、その試行と思考の軌跡を記すものである。

筆者の専門は比較文学・比較文化であり、「パリ神話の形成と外国人芸術家」に関する研究(『異都憧憬 日本人のパリ』柏書房1993年、『(仮)写真』の世紀白水社2003年、他)を経て、この十年來は、明治大正期の美術批評家・岩村透[1874-1917]が、日本の美術行政およびアーツマネジメントの形成期に、いかに大きな役割を果たしたかについての研究に取り組んでいる。岩村透は東京美術学校(現在の東京藝術大学)の初代西洋美術史教授で、エジプト文明以来20世紀に至る欧米美術の、体系的把握を試みた最初の一人であったと今日再評価できる。それと同時に、雑誌『美術新報』『美術週報』などの編集を通じて、美術情報の蓄積と発信に多大な情熱を傾けた人物でもあった(註3)。岩村は1900年初頭から(病で48歳の若さで倒れる)最晩年に至るまで、数十種にもぼる英・独・仏・伊の海外雑誌や新聞から直接、様々な美術情報(美術家の訃報、展覧会情報、美術行政や都市の景観保護、美術界の裏話に至る)を収集し、それを日本の若い読者に向けてわかりやすい形で発信し続けた。また岩村は雑誌『美術新報』の編集長・坂井犀水と共に、近代日本初の『日本美術年鑑』(1911-13年)を刊行し、現代に至る美術年鑑の基礎を確立したことも知られる。つまり岩村透は、「事実は思想の母」であるという信念の上で、美術批評の範疇を単に西洋の前衛芸術の紹介と賞揚に限るのではなく、文化行政や美術経営に対する批評の基盤となる「美術情報の収集・分析・発信」、現代で言うところの「アート・ドキュメンテーション」の確立にも力を注いだのであった(註4)。

ところで岩村透が活躍した明治大正期こそ、日本における美術雑誌の全盛時代でもあった。雑誌が美術界の時々刻々の状況を伝えると共に、作品批評や、展覧会評、美術家同士の親睦や共闘の場ともなっていたことが、筆者自身も研究の中で実感されるようになった。明治大正期の美術批評家には、実作者であった人物も多い(高村光太郎、木下杢太郎、石井柏亭など)。振り返って現代、美術雑誌の廃刊が続く状況の中、「一体美術批評の場はどこにあるのか」という疑問は、筆者がこの十数年抱き続けてきたものである。いまや全国紙の新聞各社は美術展の事業主体ともなっている関係からか、新聞紙上の美術批評の目配りが広いとは到底言いがたい。また百年前の岩村透のような、美術情報の徹底的収集と公開こそが、報道の仕事であるという信念も見受けられない。一方で、ソーシャル・ネット

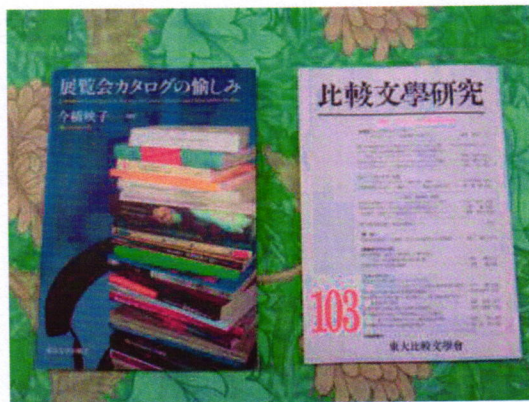


Fig. 1: 『展覧会カタログの愉しみ』(左)、『比較文学研究』(右)